NO FEAR

香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＮＯ　ＦＥＡＲ

【Ｎコード】
Ｎ９０２８Ｉ

【作者名】
香

【あらすじ】
神の手違いで死んでしまった主人公。
彼は異世界で魔王だけど勇者補佐と偽って勇者と共に行動することに。
これは魔を統べる王でありながら弱い者を放っておけないお人好しで、でも敵には全く容赦をしない、そんな青年の話。

一話（前書き）

こんにちは、またははじめまして（↑こっちのが有力）香（きょう）です。

未熟な作者ですがよろしくお願いします。

内容についてですが主人公は一話にキレていますが普段は冷静ないい人です。多分。えぇ、きっと。

私のもうひとつの話を知っている方にはまだあっちも続けますと言っておきます。

一話

「すまんな。手違いで殺しちゃったわい」

――――なんてふざけたことを告げられて。

俺はこの日を境に、色々なことに巻き込まれていくこととなった。

季節は四月。
入学式も終わり、桜が散りかけていた頃。

俺は高校生として平凡な学校生活を送っていた。

朝、通学のために家を出る。

マンションを出て5分の場所に、桜並木が続いている。
今日は幼稚園が休みなのか、いつも同じ時間にこの場所を通る四才ぐらいの女の子が私服で母親と共に遊んでいた。

その子はどうやら桜の花びらに興味を持ったらしく、花びらを捕まえようと追いかける。
俺はそんな光景を微笑ましく眺め、通りすぎようとした。
だが、その女の子は花びらを追いかけるのに夢中で道路に飛び出してしまう。

そのとき前から迫り来るトラックが見えた。
危ない。そう思った瞬間、俺の体は動き出していた。
間に合え！そう願いながら女の子へと走る。
トラックと女の子が接触する直前、間一髪で突飛ばす。少し乱暴になってしまったが仕方がない。

トラックが目の前に迫ってくる。
俺は轢かれた衝撃と痛みを感じ、意識を無くした。

そして目が覚めた。
そこは全てが白の果てなども見えない、永遠の空間で。
俺が状況が分からず混乱していると、後ろからお爺さんが近づいて来て、こう言った。

「君には異世界に行って貰うよ。なに、安心しなさい。力をあげるから死ぬことはないわい。さっき勇者を送ってしまったからあいてるポジションは魔王しかないがの」

そう言ってお爺さんはフォッフォッと笑った。

「そうじゃ、自己紹介が遅れたのう。ワシは神と呼ばれる存在じゃ」

告げられたたくさんのことに頭の処理が追いつかない。
神？異世界？――――あり得ないだろう。
小説とかでよくある異世界での転生か？　なんて、現実的な考えではない。

本当に意味がわからない。彼の言葉も俺が置かれた状況も。

全くと言っていいほど役にたたなくなった脳を動かして、ひとつ絞りだした質問は。

「……俺は死んだのではなかったですか？」

「おや、説明が足りなかったかの。そうじゃ。君は死んだ。すまんな。手違いで殺しちゃったわい」

何の悪びれもなく、テヘッという効果音すら聞こえてきそうな表情で告げられた。

「神、様？貴方は手違いで俺を殺したのですか？」

俺は顔を伏せて問う。
今聞いた言葉が聞き間違いだと信じたい一心で。

「うむ」

簡潔な肯定。

俺の中で何がかブチ切れた。
その後の俺の行動は速かったと思う。すぐさま目の前にいる奴に足

払いをかけて転ばし、腹を蹴ってうつ伏せにさせたあと、頭に足を乗せて踏みにじった。
その際、足元にある物体が、？ぶふぉっ？やら？ちょっ、謝るから、謝るから止めて？など聞こえるが、案ずることはない。下にいるのはただのゴミだ。

「人の一生を何だと思っているんですか？このジジイ」

問いながらもぐりぐりと踏みにじる。

「す、すまんかった。だからその足を退けてくれんかのう。ろ、老体にはキツイんじゃ」

「黙ってください。俺のトラックに跳ねられたときの痛みに比べたら随分とましですよ。え？その痛みを体験してみたいって？分かりました全力で痛みを再現してみましょう」

そう言ったあと頭から足を退け、フルスイングでみぞおちを蹴る。
そしてゴミ（爺）がとんで行ったほうへ助走をつけながら走り、飛び蹴りをくり出そうとするが、

「死ぬから！ワシ死んじゃうから！！」

とほざくからやむなく断念した。
あいつにはまだ話して貰うことがあるから仕方がない。

「……チッ」

「舌打ち！？というかワシ体験したいなんて言ってないのに……」

可哀想なくらいぼろぼろになって意気消沈しているが俺には関係ない。自業自得だ。

「で？手違いとはなんなんですか？」

「う、うむ。本当ならトラックが突っ込むが君は間一髪で助かるはずじゃったんじゃが、ワシが覗いておるときにくしゃみをしてしまっての。突風が起こり、トラックのスピードが上がってしまったんじゃ」

オーケー。要するにこの爺さんが悪いんだな。俺はそう結論付けた。部位を気にせず、いまだ床に座っている爺さんを蹴り続ける。

「ごめん！マジで止めて！！そして何か言って！無言は怖いから！！」

俺ははぁ、と溜め息をつくと爺さんの上から足を退けた。

「……君は老人を大切にしろとか敬えと習わなかったのかのう？」

「何を言っているんです。存分に敬っているでしょう。その証拠に貴方はまだ存命でしょう？」

なにやら爺さんの顔が青ざめたが、まあどうでもいいことかと切り捨てる。

「いいから説明して下さい。話が全く進みません。それで？俺は異世界に送られるのですか？」

「……いや、話が進まないのは君の暴力のせいじゃと……すいま

せんでした」

睨んだら黙った。

始めからそうしてればいいものを。

「ごほん。えーっと、君には異世界に行って貰う。魔王としてじゃ」

「先程も言っていましたが俺は魔王なんですよね？では勇者に殺されるのですか？」

わざわざ殺されに異世界に行くなんて冗談じゃない。

「その、頷いたら俺が殺される前にお前を殺してやると言わんばかりの笑顔は止めてくれんかのう。大丈夫じゃ。勇者が敵わないくらい強くするから……本当は勇者に倒されるようにしようと思ってたんじゃがワシの命には変えられんからな」

爺さんはボソッと呟いているがおもいっきり聞こえている。

まったく、勇者より自分の命をとるとは見下げた根性のようだ。

「嫌ですね。被害妄想も甚だしいですよ。俺がそんなことを思っているわけがないでしょう。ちなみに先の言葉、違えないようにして下さいよ。もし違えたら……ね？」

言葉と共に笑顔を向けると爺さんは凄い勢いで頷いた。

「それにしても魔王ですか。うまく魔王なんてやれますかね。勇者なんかはポピュラーだからどうすればいいかある程度予想がつきますが魔王はなかなかないですからね……」

「いや、君は今でも十分魔王らしいよ」

「……なにか言いましたか？」

「いえ。なにも」

爺さんは顔を反らした。

「まぁいいです。それより魔王とやらの役割を教えて下さい」

「おお、そうじゃった。魔王は魔に属する者の中で一番強い者に与えられる称号じゃ。別に魔族を率いて人を襲わなくてもよいぞ」

「それはよかったです。面倒ですからね」

「あれ？そういう問題？」

「ということは、俺は支配とかをしているわけではないのですか？」

「ワシの言葉は無視？……ごほん。そうじゃな。支配はしておるよ。一応な。じゃが魔族の中の知性があるものしか従えられてないじゃろうな。けれど魔獣は基本強い者に従うからの。命令くらいは聞くじゃろう。君のことじゃから歯向かえば殺すくらいはやるじゃろうがのう」

「そうですね。あと、力をくれるみたいですがそれはどういうものですか？」

「とりあえず魔力量を底なしにしておくかのう」

「因みに勇者はどれくらいの魔力をもっているんですか？」

「普通の魔術師の１０倍」

これでも他の追随を許さない魔力量なんじゃがなぁ、と爺さん。

いやぁ、爺さんが心優しい人でよかった。

「俺はどの系統の魔法を使えるんですか？」

「それはわしが決めれることじゃないんじゃ。精霊が気に入るかどうかなんでな」

つまり、どの精霊にも気に入られなかったらどの魔法も使えない？

それは最悪だな。

せっかくの魔力量も宝の持ち腐れだ。

「さて、そろそろいいかの？」

「あ、はい」

爺さんが腕を振ると鏡のようなものが出てきた。

「ここを通ってくれ。そしたら異世界につくはずじゃから」

「分かりました」

俺はそれに手を突っ込んだ。冷たい。水の中に入っているようだった。

体を全部くぐらせたとき、後ろから爺さんの声が聞こえた。

「言い忘れてたが、力を与えたことで魂が変質して容姿も少し変わったからの～」

そういうことは早く言って欲しい。

もし変にしていたら次会ったときは半殺しだなと心に決めた。

二話（前書き）

一話の後書きに書くのを忘れましたがご老人にあんな仕打ちをしては駄目です。
真似しないで下さい。

二話

目を開くとそこは森の中だった。

辺りには木々しかなく、人の気配など微塵も感じられない。

お約束な展開だと思わなくもないが、今は人里までいけるかどうかが問題だ。

このままだと餓死してしまう。サバイバルスキルなど保持してない。

しかし何故こういうときに森の中に出るのだろうか。

まだ力の使い方もわからない奴がもし魔獣に会ったら一発でやられる可能性のほうが高いだろうに。

ふと周りを見渡すと鳥が仰向けになって落ちていた。

――――先行きから不安になる要素がたっぷりだ。

近寄って確認すると死んでいるわけではなく、ただ気絶しているだけのようだった。

原因は何だろうかと考えあぐねていると心なしか大気が震えているように感じた。

しかもそれは自分を中心としているような……。

こんなことは今までなかった。というかあるほうが問題だろう。
今までと今の違いは？と記憶を辿ると該当しそうなものは、あの神とやらにもらった力ぐらいか。

「もしかして魔力……？」

俺は膨大な魔力を持っているらしい。
それを意識せずにたれ流しているのではないか。
そう考えた俺はその仮説を信じて魔力を抑えることにした。

が、

「……どうやってやれと？」

やり方などこっちは極めて普通の一般市民だった身だ。わかるはずなどあるわけがない。
しかしこのままでは埒があかない上にこんなに威圧を出していたら自分の存在に気付かれかねない。
こちらの世界の人が魔王というものにどういった感情を抱いているかは知らないが楽観視すべきではないだろうと思う。

せっかく貰った力でも生かせない状態なのだ。
それでいてこの状況。
もし敵意を持っている人が俺の存在に気付いてここまで来たら間違いなく俺は死ぬだろう。
こちらには魔法などという存在があるのだし。

考えていても状況はかわらないかと思考に一区切りをつけ、まずは魔力というのが体の中に本当にあるのかと探ることにした。

目を閉じる。
体のなかにあるものを探すのだ。こうしたほうが集中がしやすいし、感じやすいだろうから。

さて、どうなんだろう。半信半疑だが今までなかったものを探る。
そんな俺の杞憂とは裏腹にすぐにそれらしきものは見つけられた。
体の中心、丹田の辺りになにやら温かいものを感じたのだ。
すぐさま俺はそれを鍵をかけるイメージで抑えこんだ。

目をあけると先程と変わらないはずの光景。

しかしなんというか…今までモノクロだった世界に色がついたというのか。
それほどまでに感じ方が変わる光景だった。

凪いでいた風は再び吹き初め、虫たちの羽音も聞こえる。
鳥はまだ気絶したままだが魔力に当てられただけだ。
程なく気が付き、飛び立つだろう。
落ちたときに骨折していなければ、だが。

しばらく眺めていると誰かの声が響いた。
?……まして……す……おう?
声が小さくて聞き取り辛い。
けれど、遠くで喋っているわけではなく、近い場所からのような気がする。
しかしまさかといったところだ。
周りには誰の姿も見えないのだから。
っ、また……?
?初めまして。魔を統べる王??
?初めまして!よろしくね王?
?よろしく!?
?よろしくね?
今度ははっきりと聞いた。
複数の女性たちの声だ。
いや、聞いたという表現は正しいのだろうか。
何故ならば彼女たちの声は空気を震わして伝えているわけではないのだから。
言うならば念波というのだろう。
頭に直接響くものだった。
少し声を出して彼女らに問う。
――君たちは一体…?
?自己紹介を忘れていたわ?
?忘れていたわ?

?私たちは風の精霊？
?貴方は気に入ったわ？
?困ったときは言ってね力になるから？
そう言って彼女たちはクスクスと笑っていた。

「ありがとう」
そう言うと彼女たちはもう一度クスリと笑って俺の周りを回っているようだった。
目には見えないのだがなんとなく分かる。

しかしそんな穏やかな時間は続かなかった。
遠くから誰かの悲鳴――――声の高さからして女だろう――――が聞こえてきたからだ。
「精霊たち！さっきの悲鳴の場所は分かりますか？」
?わかるわ？
?案内すればいいの？？
「頼みます！」

話しが早い。
精霊たちは俺の頼みを先回りして言ってくれた。

?:急いでいるのね?
?:急いでいるの??
?:なら風の力で速めてあげる?

精霊がそう告げると体がいきなり軽くなり、普段とは比べようもない程の速さがでた。

?:もうすぐね?
?:もうすぐだわ?

彼女たちの言うとおり騒がしくなってきた。

?:ほら、そこよ?
?:頑張って?
?:怪我しないでね?
?:力を貸して欲しかったら言ってね?

会ってすぐの彼女たちに心配されるとは。

彼女たちに礼を告げ、現場に向かう。

目に入った光景は。
少女が狼のようなものに崖を背にして剣を振り回して戦っていた。
防戦一方の彼女は徐々ににだが後退していっていた。

さて、狼のような――――このような表現をしたのには理由がある。
それは額に三つ目の瞳を持っていたからだ。
あと、みている限り剣でもなかなか刃が入らないようだ。
当たっても全然と言ってもいいほどダメージがないらしくケロリとしている。

このままだと彼女は狼もどきに喰われるか崖から落ちてしまうだろう。
彼女の剣捌きはとてもじゃないが上手くはなく、ただ振り回しているだけでなんとか牽制しているが隙が多い。

間に割って入るか。
そう思ったら俺と反対側から誰かが飛び出してきた。

思わず俺の体はその場で膠着してしまう。

その男は手に木の棒を持って狼もどきに殴りかかった。

嘘だろ。
それを見たとき俺はそう思った。
今まで少女が剣でいくら叩いてもダメージがなかったのに……なんで伸びてしまっているんだ？

一体どんなバカ力なんだろうか。

俺が呆けている間に男は五匹いた狼もどきのうち三匹を片付けてしまっていた。

このまま全部の狼もどきを駆除してしまうのかと思えたが、狼もどきは何を思ったのか残りの二匹が同時に少女に襲いかかった。

突然のことに対して対処が出来なかった少女はバランスを崩し崖から落ちようとした。

男もとっさに体が動かず少女の伸ばした手を取れない。

俺は急いで彼女たちに指示を出す。

「精霊！彼女を…！！」

？任せて？

「――――切り裂け！？空断？（クダン）」

少女のことは精霊に任せ、走る道すがら教えて貰った攻撃魔法のスペルを唱える。

その言葉と共に鎌鼬のようなものが狼もどきに斬りかかり、狼は血を飛ばしながら絶命した。

それを見てひとまず安堵し、大きく息を吐いた。

二話（後書き）

ちなみに私は今テスト1日前。
何をやっているのでしょうか。

何故精霊がなついたかは追々話に入れます。

三話（前書き）

登場人物が中々揃わないです。

三話

精霊に任せた少女の方を見ると崖から少し落ちたところでふわふわと浮いていた。

俺はそんな少女に声をかけ、手を伸ばす。

「あぁ、すみません。掴まってください」

「……あ、はい」

彼女は応えると、俺の手に自分の手を重ねた。

俺は彼女の手をしっかりと掴むと崖の上に引き上げ、抱き止める。

間近でみた彼女は可愛い容姿をしていた。

金髪に空を映したような透き通った青の瞳。雪のように白い肌にぷっくりとした桜色の唇はよく映えている。

そんな彼女の白い顔だが、薄紅に染まっていた。

俺はそんな彼女の様子を、多分男に耐性がないからだろうと推測した。

今は抱き止めているので体が密着しているからきっとそのせいだろうと。

よく見てみると彼女の身に付けているものの装飾品は豪華だった。

お嬢様のようだが、仮にそうだとしたら何故こんなところに一人でいるのだろうか。

疑問は尽きないが男に耐性がないのだったらこの状態のままでいるのは悪いだろうと思い、彼女から二歩ほど離れることにした。

「助かった。助太刀サンキュな」

声が聞こえた方を向くと、件の男がいた。
彼は俺と同じぐらいの年頃でどこかの高校の制服と思われるブレザーを着ている。
おそらく彼は勇者だろう。
事前に神から勇者を送ったばっかりだと聞いていたから。

彼を見てみると、なるほど、勇者だというのも頷ける。
日本人にしては色素の薄い茶色の髪に黒の瞳。
意志の強そうなキリッとした目をしている。
顔立ちも整っており、まさに勇者様といったところだ。
オーラからして光輝いて見えるのは俺が彼が勇者だと知っているからだろうか――――多分そうだろう。きっと。

しかし……、勇者と魔王を同じ場所に送るなんてあの神は一体何を考えているのやら。

「いえ、俺が勝手にでしゃばっただけですよ」

そう言って俺は嫌味にならないほどの微笑を向ける。

「そういや自己紹介がまだだったな。俺は櫻井響。ヒビキと呼んで

くれ」

彼は笑いながら手を差し出してきた。
俺も同じく名乗りながら握手を交わす。

「俺は神崎颯人。俺もハヤトでいいです」

そう言うと、ヒビキはここからが本題というように真っ直ぐ俺の目を見て聞いてきた。

「なぁ、ハヤト。その服装を見るからにお前は俺とおなじ――――」

先の言葉の予想がつくので彼が言い終える前に肯定をする。

「えぇ。こちらの人からみた異世界人です。そういうヒビキは勇者ですよね？」

彼はちょっと不意を突かれたように目を見張った。

「よくわかったな」

「あのお爺さんから先に勇者は行っていると聞いてましたので。あ、俺は勇者の補佐みたいなものです」

本当は補佐を付ける予定はなかったらしいのですがなにやら手違いで俺を死なせてしまったから急遽付けることにしたらしいです、と付け加える。

これで何故神が補佐のことを告げなかったのか、疑問に思われることはないだろう。

我ながらよくも悪びれもなくスラスラと嘘がでてくるなと思わなくもない。

しかしここで、実は俺、魔王です。なんて告げれるわけがないだろう。

そんなことを言ったら殴りかかられる。

それに勇者の補佐ってことにしたら衣食は簡単に手に入れられるはずだ。

なぜなら、森の中で襲われている少女を助けるなんてお約束をしたらつぎは、少女の護衛かなんかがきて、お礼をしたいからとか、実は勇者を探してました、とかで少女に連れられて客としていい待遇を受けられるはずだ。

その証拠に少女の格好はお金持ちのお嬢様っぽいし。

――――――まぁ、そんな打算で助けたわけではないけれど。

俺が付け加えた言葉にヒビキは少し苦笑をした。

この反応、もしかして――――――

「なんだ。俺も同じだぜ。あの爺さんに間違えて殺しちゃったとかぬかされてここにいる」

……やっぱりか。

あの爺さんも懲りないようだ。

まさか勇者も同じ理由だったなんて。
てっきり召喚に応じて勇者に相応しい人を選んで送ったのかと思っていたのに。

ヒビキと話していると精霊の声が聞こえた。

?ねぇ、王。私たち、役にたったかしら?
?役に立てたかしら?

そう言えば彼女たちにお礼を言うのがまだだった。

「役に立ってくれましたよ。助けられたのは貴女たちのおかげです。本当にありがとう」

その言葉に彼女たちは本当に嬉しそうに笑った。

?やったわ?
?やったわ?
?役に立てたわ?
?お礼も言って貰ったわ?

精霊たちは踊るようにくるくる回りながら喜んでいるようだった。

彼女たちの行動につい笑みが零れるが、視線を感じ、ヒビキを見てみると、彼は不思議そうに此方を見ている。

「ハヤト?誰と話しているんだ?」

「聞こえないのですか?」

「一体何の――」

彼の言葉は途中で遮られた。

黙っていたもうひとりの人物、助けた少女がいきなり声を張り上げたからだ。

「ゆ、勇者！？勇者と言いましたか！？あなたたちは勇者なんですか！？」

「そうですよ。正確にはヒビキが、ですけど」

どれだけ反応が遅いんだと思うが、彼女の反応からしてこれは勇者を探していたなと思う。

「勇者様、私たちはあなたを――」

しかし少女の声も妨げられる。

後ろからガチャガチャと鎧が歩く音、つまり鎧を着た兵士たちがやってきたからだ。

予想どうりのお約束的展開だなとある意味感心すらする。

「おい！お前ら！姫様から離れろ！！」

兵士の一人がそう声をあらげ、他の面々も剣を抜いた。

ヒビキは身構え、少女はどこか焦ったように声を上げた。

「待ちなさい！この方々は勇者様です！彼らに剣を向けることはゆ

るしません！！」

さすが王家に連なる者。
声に威厳があった。

少女の言葉を受け、兵士たちは一斉に剣を直した。

少女はそんな兵士たちを満足そうに見ると、此方に向き直り告げた。

「申し遅れましたが私はラガリア王国、第一王女、サラ＝レイル＝ラガリアです。私たちはあなたたちを歓迎いたしますわ」

三話（後書き）

笑いの要素が全く入ってくれないのは何故か。
主人公がテンション高い奴じゃないから？
や、だって祐希のほうはまだあったし……
すいません。作者の力量ですよね
でもボケられる人が中々いないんですよ。
皆真面目だし、裏設定考えてたらどんどんシリアスに。
一話を読んだ人から詐欺だと思われるくらい重くなったらどうしようと考えている作者。
が、頑張ってみます。

四話

サラ先導のもとに――――周りを兵士に囲まれつつ、だが――――俺たちは森を出るため現在歩いている最中だ。

?王様、王様?

?勇者と行くの??

?魔の王なのに??

精霊たちが不思議そうに声を上げた。

俺はそんな彼女たちに言葉を返そうとするが、　ふと気が付く。

――――先程のヒビキの反応を見るに、他の人に彼女らの声が聞こえていないのなら、俺が彼女らに話しかけたら一人誰もいないところに話しかけている人になるのでは?

周りを見てみるが誰も声が聞こえた素振りはない。

だが彼女たちに返答をしないといけないだろう。

そういや彼女たちの声は念波のようなものだ。

なら頭の中で話しかけて見ればいいのではないだろうか。

『精霊たち、聞こえますか?』

?聞こえる。聞こえるわ?

?凄い、凄いね王様?

?凄いわ?

どうやら無事成功したようだ。

『凄いって何がです？』

？王様、私たちと念で会話したわ？

？誰もそんなの出来なかったのに？

？だから凄いの？

？凄いのよ？

そうなのか。

案外あっさりと出来てしまったのだけれど。

『先程の質問ですが俺は彼らについていきますよ』

？どうして？？

？どうして？？

『そうですね。

理由は色々とありますが、あえて言うなら、その方が面白そうだから、でしょうか？』

？そうね？

？そう？

？面白そう？

？勇者と行動する魔の王なんて？

？面白そうだわ？

どうやら俺の考えは彼女たちのお気に召したようだ。

『ところで王様と呼ぶのは止めてくれませんか？ハヤトでいいです

よ？』

？いいの？

？いいのよ？

？王様は王様だから？

？でも名を許してくれてありがとう？

彼女たちはまた嬉しそうにくるくる舞っているようだった。

断られてしまったが、彼女たちがいいと言うのならその呼び方でいいのだろう。

此方としては王様なんてむず痒いものがあるのだけれど。

「そろそろ森を出ますわ」

サラの言葉を受けて前を向くと道の先に光が見えた。多分あそこだろう。

そこへは5分程でつけた。

そこにはサラが乗ってきたのだろう豪華な馬車と、兵士たちの馬があり、俺たちはサラに促されて馬車に乗り込んだ。

「今から王都に向かいますわ。今から二時間程かかるのですが、その間に説明をした方がいいかしら」

彼女の提案はありがたい。

なんせ来たばかりで情報が不足しているのだから。

「お願いします。それと敬語じゃなくて構いませんよ」
彼女のような地位の高い人に敬語を使われると、そんなことはないのに地位が高い者だと周りに誤解を与えてしまう。
それに、彼女には悪いが彼女のしゃべり方に無理があるような気がする。
敬語自体に問題はないのだが、しゃべり慣れていないのだろう。
なんとなくぎこちない印象を受けた。
「そ、そう？なら貴方も敬語じゃなくていいよ」
彼女はどこかほっとしたような表情をして言った。
後に続けて言った言葉は俺に言っているのだろう。
ヒビキは森で話しているうちにだんだん敬語がなくなっていったから。
これについてはなかなか敬語を使う機会なんてないから仕方ないと言えば仕方ないだろう。
「いえ、俺のこれはクセみたいなもので。これが自然体なんですよ」
だから気にしないで下さいと微笑む。
サラは何故か固まってしまった。
もしかして勇者の代わりに彼女を助けてしまったから本来ヒビキのフラグだったのを俺が立ててしまった……なんてわけないよな。
それは自意識過剰というものだ。
平凡な俺と違いヒビキは美形だから、俺が最後にちょっとだけ助け

たからってヒビキのフラグが折れることはないだろう。
俺はバカな考えを放棄して、サラに話しかけた。
「では質問してもいいですか？」
「え、あ、はい」
彼女はやっと気が付いた。
「まず、何故貴女は一人であんなところにいたのですか？」
「確かに。なんで女の子が一人でいたんだ？」
俺の質問にヒビキが便乗する。
俺とは違い、純粋に彼女の身を案じてのことのようだが。
「えっと、勇者様を探しに私たちはあの森に行ったんですが、ちょっとはしゃいでたら、みんなと離れちゃってて……」
サラはうつむきながら話した。
外見からして同じぐらいの年のようだから、いい年して迷子になったことが恥ずかしいのだろう。
フォローは……無理だ。
せめても俺は話題を変えるためにも急いで話しを進めることにした。
「ゆ、勇者を探しに来たということですが、勇者が来ることがわかっていたのですか？」

「あ、はい」

対面に座った彼女の淡い金の髪が頷いたことにより波うつようにひろがった。

「実はお告げがあって、勇者が来ることはわかってたの」

「お告げ、ですか」

「はい。この国には先読みの巫女がいて……。実は私だったりするんだけど」

そう言ってサラは少し照れたように笑った。

「へぇ……。先読みか。どんなことが出来るんだ？」

「この国に関わる大事を神託することが出来るのよ。先読みの巫女はね、代々王家の女の子が着く役職なの。私は母様のあとを継いで巫女になったのよ」

その仕事に誇りを持っているのだろう。彼女の顔は誇らしげだった。

「的中率はどれくらい？」

「ほぼ外れたことはないわ」

「ほぼとはどういうことなんです？」

言い切った割には言葉の頭に付けられた言葉が気になる。

「私が知ってる限りって意味……」
信憑性が下がった。

「でも勇者様たちが無事でよかった」
彼女はそう微笑んだが意味がよくわからない。
何か危険でもあっただろうか。

「というと？」

「森の中で凄い重圧感を感じたの。あれはかつてない強大な力をもった魔王が生まれたからよ」

……どうやら気付かれていたようだ。
目の前にいることが気付かれなければいいが。

ん？かつて？
ということは魔王は元々いるわけか？

「それは俺も感じたな。すぐに消えたけど。先読みで魔王が生まれることはわからなかったのか？」

「一応神託を受けたわ。誰も太刀打ち出来ないほどの力を持った魔王が現れるだろうって。でもそれは、今年ってことしかわからなかったの。まさか勇者様がくる日と同じだなんて」

「まあ、言っても仕方がないことですからね勇者が来るよりも前じゃなかったことを喜びましょうよ」

そう言ってこの会話を打ち切る。
このまま続く色々とヤバい。

窓のそとに目をそらすと城とその城下町が見えた。

四話（後書き）

疲れてきました。

五話（前書き）

今回、何の面白みもなくたんたんと話が進みます。
いや、実際余り進まないのですが。
はやく一段落ついてかけあいが出来るくらいまで話が進んで欲しいです。

五話

城門をくぐり、城壁の中へと馬車は進む。

「着いたらまずは部屋に案内するわ。しばらくしたら謁見に呼ばれると思うからそれまで待っててね」

「わかりました」

いきなり王に謁見か。

バレないだろうか？

宮廷魔術師長とかに正体が見破られたり、マジックボックスに手を突っ込んでオーラを調べたりしないことを切に願う。

バレたときのために早めに魔法を覚えたい。

森で使った魔法は短縮形だったらしく、長いスペルを本当ならとなえないといけないらしい。

暗記しなければならないのか。

凄く面倒だ。

あと、風の精霊たちに聞いたが彼女らが知っているのは風の魔法だけで、他の魔法は知らないらしい。

風の魔法以外を誰に教えて貰うかな。

俺は風の精霊の声しか聞こえないし。

……まずはそこから考えなくてはいけない。

先が長そうなこれからのことを思うと酷く嘆息をしたくなった。

だんだんとスピードが落ちて来ていた馬車が完璧に止まる。
どうやら着いたようだ。

扉が開かれ、サラ、ヒビキ、俺の順に馬車を降りた。
俺が地面に両足を着けたとき、俺の横に来ていた兵士に声をかけられた。

「やぁ、少年。さっきは出会い頭に剣を向けてごめんな」

おそらくこの人は森で誰何をしてきた兵士だったのだろう。
声が同じだ。
ただ残念なのは兜のせいで顔まで確認出来ないところか。
「いえ、あなたも仕事ですし仕方がないですよ。あと俺はハヤトと呼んで下さい」

俺の返答に彼は笑んだようだった。
顔が見えないのであくまでも雰囲気的に判断したのだが、多分あっているだろう。

「そう言って貰えるとありがたいね。俺は第一王女近衛団、団長のキース＝アレイ。よろしくな」

「あ、俺はヒビキです。よろしく」

お互い名乗りあったところで城から誰かが走って来た。

「ありゃ伝令だな」
団長の言葉通り、彼は俺たちの前で足を止めると伝言を告げた。
「姫様、用意が出来ました」
「わかったわ。ご苦労様」
サラは伝令を労うと俺たちに向き直り、
「じゃあ今から案内するわね」
と言った。

彼女に連れられて城へと入る。
構造や外見はヨーロッパにあるものに似た造りだった。
少し歩くとサラはある部屋の前で止まった。
「左の部屋をヒビキさんが。右の部屋をハヤトさんが使って。案内の人がくるまでうろつかないでね。謁見が終わったら案内するからそれまで待っててね。絶対よ」
自分が案内したいのだろう。
彼女は必死に何度も念を押す。

薄々思っていたが彼女は言動に少し幼いところがあるようだ。
かわいいなと思い、思わず少し笑ってしまった。

部屋は一人でいるのにはずいぶんと広いものだった。
部屋に入るととりあえずベッドの上に腰をおろす。
その際思ったよりもベッドがふかふかで驚いた。
流石王城の客間。

くだらないことに感心していると風の精霊たちが教えてくれた。

?:王様王様？
?:この部屋穴があるよ？
?:穴がある？

『穴、ですか？』

?:そう。穴？
?:部屋の穴？
?:空気の通り道？

それってもしかして

『盗聴用の……？』

?:そうだわ？

？そうね？
？穴は人のところに繋がっているもの？

『では魔法かなにかで覗かれていたりしませんか？』

？ちょっと待って？
？見てみるわ？
？うん。見ている人がいる？
？いるわ？
？どうするの？？
？どうしようか？？

『一応、見ている人と聞いている人、その人たちの顔を覚えていて下さい』

？わかったわ？
？わかった？

盗聴に監視か。

もしかして俺が魔王だとバレている？
いや、それはないはずだ。
それにしては警備体制が緩すぎる。
俺を危険視しての行動ではないだろう。

サラは何も知らなさそうだし、王の命令ではないのだろうか？
だとしたら、勇者を取り込みたい派閥かなにかか？
いや、まだ王の線がなくなったわけではないのだから容易に結論付けるのは危険か。

『困りましたね。魔法について練習しようと思ってましたのに』

？なら結界を張ればいいわ？

？外の人には感知されない結界？

？スペルは私たちが教えるわ？

けれど結界を張れば俺が魔法を使えることがバレる……遅かれ早かれ勇者補佐なんだからバレるか。

魔獣の討伐とかしないといけないだろうし。

しかし結界を張るってことは監視に気付いていると相手に伝えしまう。

俺は色々と考えたのち、

『頼みます』

結界を張ることにした。

？じゃあ唱えてね？

？今回は短縮形じゃないからね？

「集え、我らを護りし者よ。彼の力をもって今ここに外界からの遮断を。興れ、？風陣？（フウジン）」

風が吹き、髪の毛が煽られる。

自分を中心にしてドーム状の結界が形成された。

？成功ね？

?成功したわ？

「ん。ありがとう」

彼女たちのおかげで結界を張れたので、早速魔法を練習してみることにする。

俺にはどこかの小説のようにとある流派の跡取りなんて設定はない。せいぜい中学の時に体育で竹刀を振り回したぐらいだ。

だからファンタジーの世界で生き残るには魔法を覚えるしかないだろう。

せっかく魔力は十分にあるのだし。

いや、剣に憧れなくもないんだけど、練習するのもちょっとな。

俺は楽したい。

というわけで、風の精霊たちに色々な魔法のスペルを教えて貰った。

その途中、前から気になっていた質問をしてみた。

「俺は風の魔法しか扱えないのですか？」

?そんなことないわ？

?火、水、土。全部出来るわ？

?精霊たちに気に入られているもの？

「気に入られている？どうしてですか？」

？私たちの存在を感じられる？
？気付いてくれるから？
？そして何より――――？

コンコン。
部屋の扉が叩かれた。
謁見の時間か。
彼女たちの話を聞きたかったが仕方がない。
俺は彼女たちに詫びを入れると結界を解き、扉を開いた。

五話（後書き）

今のところ八話にヒロインが出てくる予定。
それまで長い。

掛け合いは九か十話辺りでやっと入れられる予定。
けれど予定は未定。
……期待はしないで下さいね。

六話（前書き）

今回はちょっと短いです。

総合ｐｔが１００ｐｔこえてました。
入れてくださった皆さんありがとうございます。
作者のやる気が上がると共に、え？なんで？ていうかこの先見捨てられたらどうしよう、という不安も膨れ上がっています。

頑張って飽きられないようにしたいと思います。

……まだあんまり話のプロット出来てないんですけどね。

六話

迎えにきた侍女に連れられてヒビキと共に謁見の間に向かう。

「王様に会うなんて緊張しねぇか？」

「そうですね。日本でこういう経験をする機会なんてないですからね」

実は俺も王と呼ばれる存在であったりするのだけど。

「だよなぁ。俺は敬語が苦手だし、作法とかわからないから謁見が気が重い」

「あー、確かに。サラの父親ってことでフレンドリーな感じを期待するしかないですね……」

あの人は最初に出会ったときはともかく一国の姫とは思えないくらい親しげだ。

一応、臣下の前では王族らしく振る舞おうとしているのがわかるが、彼らの目は最早孫を見るような感じになってしまっている。

その親ということで同じような人柄だと期待したい。

「「はぁ」」

ヒビキのため息と俺のが重なる。

沈んだ空気に先導してくれている侍女さんが訝しげに此方を見てきたので、パタパタと手を振って、何でもないと誤魔化した。

「勇者一行が着きました」

「入れ」

低い重低音の声が響き、衛士が扉を開ける。

一行ってまだ二人しかいないのだけど、とどうでもいいことを考えた。

結構余裕を持っている自分に呆れてしまう。

?王様、緊張してる??

精霊が訊ねて来た。

『思ったよりしてないですね』

?する必要なんてないわ?

?相手は人の、一つの国の王?

?魔を統べる貴方のほうが?

?ずっとずっと凄いもの?

彼女たちは謡うように言葉を紡いだ。

これは俺を励まして言っているわけではなく、本当に心から思って

いるようだ。

けれど俺には彼女たちの言うような凄い人という自覚は全くなかったので、苦笑するしかなかった。

部屋には厳粛な雰囲気が漂っていた。

王と王妃は数段高いところに正面を向いて座っており、脇にシンプルなドレスに着替えたサラが立っている。

そこまで威圧感は出ていなくてよかったと密かに息をつく。この世界に来たときの俺が発したやつのほうが格段に上だ。

隣のヒビキを見てみるとそんな威圧感を感じ、うっすらと汗ばんでいるようだった。

……もしかして俺の感覚がおかしいのだろうか？

壇上からは赤いカーペットが一直線にひいてあり、先導を無くした俺たちは横に並びながらその上を進んで行った。

ここでちょっとした疑問がある。

果たしてどれくらいのスピードで歩けばいいのだろう。

個人的に結構難しい問題だと思うのだけど。

「止まれ」

兵士の一人に命令されて足を止める。

そのまま突っ立っていると周りの人達の視線が凄いことになりそうだったので、とりあえず腰を７５度ほどに折ってみる。

その際に横目でヒビキを見ると慌てて俺と同じように頭を下げた。

王がおもむろに口を開く。

「そなたたちが勇者で相違はないか」

今更そんな確認いらないだろうと思ったがもちろん口には出さない。

「はい。勇者のヒビキ＝サクライです」

「その補佐のハヤト＝カンザキです」

ところで自分から勇者と名乗るのは恥ずかしくないのだろうか。

今度機会があればヒビキに訊いて見ようと思う。

「して、勇者には頼みたいことがある。……魔王の討伐だ」

はい、ここにいますよ。
なんて。

しかし俺は何もしていないのだけれど、なぜ討伐されなければいけないのか。

「ここ数年、魔獣が増えていてな。たくさん人間に被害が出ておる。その上かつてないほど強力な魔王の誕生だ。この機会に魔族たちは勢いづいて攻めてくるだろう。それを防ぐためにも魔王を倒して欲しいのだ」

……全部、憶測のような気がするのは気のせいだろうか。
いや、完璧に濡れ衣だろう。
俺には全くその意志はないんですが？

「異世界から来た君に頼むのは心苦しいのだが、頼む。魔王を倒してくれ」

そう言って王は頭を下げた。

その行為にヒビキや周りにいる臣下に動揺が走る。

「顔を上げてください。俺は言われずともそのつもりです」

そんな安請け合いしていいのかと俺は思う。

だって俺、あの神に勇者に負けないように魔力たくさんもらったし。
しかもヒビキは油断してるから殺ろうと思ったらいつでも殺れそうだ。
まぁ、殺る気は今のところないけれど。

「そうか。ありがとう。私も出来るだけ力になるから何かあったら言ってくれ。あと、君たちはこの城で客人として扱われる」

王はそれだけを言うとサラを呼び、滞在中の世話をさせるとして紹介した。

六話（後書き）

今回ハヤトがどうでもいいことばっか考えて話が終わりました。
余裕なんてありまくりですよあの人。
多分謁見にあきかけてたようです。

七話（前書き）

何だかもうストックがなくなってきた。さっさと書かないとと思いつつ思いつかない感じです。
戦闘シーンとか書けないクセにこんなん書き始めてますからね。
入れれますかね、戦闘。
入れますよ？いつかきっと……。

七話

謁見の間を出たところでヒビキが息を吐き出した。

「すっげえ緊張した」

その言葉にサラが笑う。

「そうだよね。父様のオーラ凄いから」

慣れている筈の私も身がすくむもん、とサラ。

やはり俺の感覚がおかしかったようだ。

「そういえば俺たちが異世界から来たことを知っていたんですね。それも先読みでわかったのですか」

「うん。でもハヤトさんのことはなかったのよ？」

そう言って彼女は悪戯っぽく笑った。

此方としてはバレるかどうか気が気でない。

しかしヒビキから助けが入る。

「俺たちを送って来た神が結構いい加減な人でな……予定になかったらしいが急遽ハヤトも送られて来たらしいぞ」

と苦笑気味に話した。

「……神様っていい加減なの？」

驚いたようにサラが聞き返す。

巫女である彼女にとっては信じられないみたいだ。

とうてい、俺はそんな神を足蹴にして脅したりしました、なんて言える感じではない。

言うつもりは端からないけれど。

そんなことよりも現在俺には気になっていることがある。

「ちょっといいですか、サラ。俺たちは今どこに向かっているのです？」

そう、最初は部屋に戻るのかと思っていたが、明らかに違う道を進んでいる。

彼女は、ん？と振り向くと

「あれ？言ってなかったっけ？今から宝物庫に行くの」

と言った。

そんなこと一言も言ってません。

「何しに宝物庫に行くんだ？」

「一つだけ宝物庫のアイテムをプレゼントしようってことになってね、好きなものを選んで貰おうと思って。色々と加護がついたもの

とかがあるから、きっと役に立つと思う」
それは太っ腹な。
宝物庫にあるくらいなのだからきっと価値が高いものだろう。
「それは俺も貰っても構わないのですか」
「もちろん。あ、ほら。着いたよ」
サラが指差す方を見る。
そこには頑丈な鍵がかけられた少し古ぼけた扉があった。
「ちょっと待ってね。今開けるから」
彼女はそう言ってポケットから鍵を取りだし、開錠すると扉を押した。
が、いかんせん扉が重くて彼女一人の力では動かない。
「手伝うよ。ハヤトはそっちな」
ヒビキの指示どうり、彼と反対側に周り扉を押した。
ギギィ……。
そんな音を立てて扉が開かれると中は真っ暗だった。
三人とも中に入り、サラが燭台に火をつける。
火の光に照らされなかの宝物たちが輝いた。
今まで闇の中にいたのでその輝きは目に痛いほどだった。

「さ、好きなものを選んでね」

「はい。でも量が凄いですね……」

サラに促され、何がいいかと辺りを見渡す。

何となく呼ばれている気がして、俺はその方向に向かった。

こういうのをインスピレーションというのだろうか。

なんて考えながら。

俺は他の者たちをかき分けて一つのペンダントを引っ張り出した。

それは雫形の紫の宝石に銀のチェーンがついたシンプルなもの。

――――これにしよう。

何故かは分からないが、角度を変えると濃淡が変わる、ふしぎな紫のグラデーションに惹かれた。

「俺はこれにする」

そう言ってヒビキが選んだのは数種類の宝石がちりばめられたブレスレット。

サラはそれを見ると手に持っていた紙の束をペラペラ捲り始め、あるところで止まった。

「ええっと……それは火の加護がかけられているやつだね。具体的な仕様方法は剣に炎を纏わせたり出来るみたい」

どうやら持っていた紙の束は宝物の品目だったようだ。

「へぇ、結構便利だな。ハヤトは選んだか？」

ヒビキはブレスレットを眺めたあと、俺に話を振ってきた。

「あぁ、はい。選びました」

そう言ってペンダントを見えるように掲げる。

「……えっとそれは……」

サラは再びペラペラと捲り始める。

「……随分と古い物なのでこれに対する記述は残っていない。また、実験でどのような能力も発現しなかったことから、何の能力を持っていないのではないかという意見もある。……だそうです。えと、違う物に変えてもいいよ？」

サラはそう言ってくれたが他の物に変える気は起こらなかった。

「いえ、俺はこれがいいです」

「そう？」

彼女はまだ納得いってないようだったがこのままここにいても意味がないため、宝物庫から出ることにした。

七話（後書き）

そう言えば記念ＳＳとかあったほうがいいんでしょうか？
書ける程まで話はあんまり進んでいませんが。
なんかあったらリク下さい。（↑自分で思いつかない）

八話（前書き）

……いきなりの展開。
先に言っておきましょう。
作者も予想外だった、と。
言い訳の続きは後書きで。

総合ｐｔ２５０　いきましたね。
入れて下さった皆さんありがとうございます。
感想も初めてもらいました。
本当にありがとうございました。

けれどやはり作者的にはプレッシャーがぁぁぁ！！
み、見捨てないで下さいね！！

八話

あのあとサラたちに別れを告げ、与えられた部屋に帰った。
サラは城を案内したがっていたが、色々なことが起こり過ぎて精神的に疲れているため断ったのだ。
城の案内は明日にしてくれるらしい。

俺はベッドに倒れこむ。
するとすぐに睡魔が襲って来た。

ベッドの頭の上らへんがへこむのがわかった。
……誰かいるのだろうか？
髪を撫でられているようで少しくすぐったい。
「……ん」
ゆるゆると目を開くと紫の瞳が覗き込んでいた。
「あれ、その瞳……」
あのペンダントと同じ不思議な濃淡の紫。

「――――きれいだ」

頬が緩み、ふわりと笑った。

すると、目の前の顔が一気に赤くなり、ガバッと俺から距離をとる。

「――――っ」

顔を赤くしてこちらを見ている彼女は凄い美少女だった。
絹糸のような細いなめらかな腰まで届く銀の髪に、あの紫の瞳。
年格好は１７才ぐらいで俺たちと同じぐらいだろう。
スラッとした体つきに同年代の少女たちよりも幾分か豊かな胸。
同性からでも憧れられるような、そんな姿をしていた。

けれどなぜ彼女は顔を赤く染めているのだろうか。
ゆっくりと上半身を起こしながら、寝起きであまり働かない頭で考える。

そこで、俺は動きを止めた。
自分の言った言葉を思い出してたからだ。

――――初対面の女性の瞳を見て綺麗だなんて呟くとか、一体俺はどこのタラシなんだ。

自覚すると本当に自分が嫌になって来た。
けれどいつまでも自己嫌悪しているわけにもいかない。
そういや今更ながらの疑問だが、彼女は一体誰なんだろう。

「えっと、君は……？」

「あ、わ私は始祖精霊だ」

彼女は少し焦りながらもそう答えた。

「始祖精霊とはなんですか？」

「その名の通り始まりの精霊だ。精霊の頂点に君臨する存在であり、根源だ」

やっと落ち着きを取り戻したようで俺の質問によどみなく答える。

「そんな君がなぜここに？」

なぜそのような大物が俺の部屋にいるのだろうか。

「王が持っているペンダントがあるだろう。私はその石のなかで眠っていたんだが、王の魔力によって目覚めたんだ」

彼女は俺が胸にかけているペンダントを指さして言った。

「やっと魔力がたまって実体化出来ると思ったら王は寝ていて暇だったんだぞ」

拗ねたようにそこまで話すとベッドに腰掛けた。

「それはすみません。ところで何故貴方はこの石の中に？」

俺がペンダントの石をつまんで眺めながら問うと彼女の顔がくもる

のがわかった。
慌てて俺は言葉を継ぎ足す。
「深い理由があるのなら別に言わなくていいですよ」
「いや、大丈夫だ。話そう」
そうして彼女が語った話はというと。
宝石には精霊の力を封じたり、閉じ込める働きがあるらしい。
彼女が封じられたのは約５００年前。
その時彼女が住んでいた森で、ある瀕死の魔法使いを拾ったそうだ。
彼を手当てし、怪我が治るまでにはずいぶんと仲良くなったらしい。
そんなある日のこと。
彼は彼女を不意をうってこの宝石に閉じ込めた。
一緒に暮らしていたら何かと隙が出来る。
その機会を彼は待っていたのだと告げられた。
彼女を見つけたのは全くの偶然らしいが、死ぬと思ったらこんないいモノが手に入るなんてと彼は笑ったという。
それからが地獄だった。
と、彼女は呟いた。
顔を伏せていたから俺にはその表情は見えなかったか、声には自嘲的なものが含まれていたと思う。
彼女は抵抗出来ないほど魔力を奪われて、残った魔力は全部人のいいように使われ、搾りとられていったという。
それだけならまだいい。
大き過ぎる力は、人のよくないものを惹き付ける。
彼女の力は主に生命をほふるために使われたそうだ。

それは彼女かどんなに泣き叫んでも、どんなに訴えても、けしてその声は届かなかった。
それはもう、拷問に近い。
彼女が力を無くし、眠りにつくまで延々と続いた。

このままだと自我を無くし、存在さえ消え去る。
そんな時。
俺の声が届いたらしい。

俺の魔力が流れこむことで彼女は力を取り戻し、実体化出来るほどまでになったという。

普通、精霊が閉じ込められている宝石には魔力を流すことは中の精霊を解放してしまうので禁忌とされている。

そんなことを全く知らない俺だから彼女を助けられたのだろう。
今ではもう、力も何も感知されずに宝物庫の奥深くに眠っていた彼女を。

「……ひとつ、いいですか」

「なんだ」

彼女の表情は相変わらず見えない。

「貴女は彼を好きだったのですか？」

「好いては、いた。けれど恋情じゃない。家族のような……、そ

んなものだと、思ってた。彼も、彼もそれは同じだと」

当時のことを思い出して感情が高ぶったのか彼女の肩が震える。

俺には彼女の受けた裏切られたときの衝撃、哀しみは想像しか出来ない。

家族同然に思っていた存在にモノ扱いされていいように利用される……

その時、彼女は人を恨んだのか、彼を恨んだのか。

きっと彼女は人を憎んではいない。人々がほふられる様を見て泣き叫んだというのだから。

じゃあ彼を恨んだのか。

それもきっと間違いで。

それならば彼女は彼を思い出したとき、伝わって来るのは哀しみの感情じゃなくて怒りだろう。

ならば誰を恨んだのか。

行き場のない負の感情は何処に行ったのか――――残るは自分しかいないのではないか？

俺は彼女を無言で引っ張り、腕の中に閉じ込めた。

後ろから抱えこんでいる状態だ。

彼女は特に抵抗をしない。

「君は、自分を責めていませんか？」

彼女の体が強張るのがわかる。

「……責めるも何も、私が……。私が彼に騙されなければ皆死ななかった。私が皆を殺したんだ。私が彼にも家族と思ってもらえるようにもっと頑張ったら彼もそんな行動に出なかった。私が……」

「はい。ストップ」

自らを責め続ける彼女の口を手で覆う。

何故かとこちらに横目で訪ねる彼女に言う。

「それは結果論でしかありません。その時点で彼が裏切るなんてわからない。それに、貴女が原因ではない。貴女だけが悪いわけじゃない。だから全て自分のせいにして責めては駄目です。そして――――俺は貴女のように優しい人を他に知りませんよ」

だから、自分を責めないで欲しい。

誰よりも優しい彼女はきっと、自責の念で潰れてしまうだろうから。

そっと口を覆う手を放すと彼女は泣きそうな声でありがとう、と呟いた。

「けれど、私は中々自分の考えを変えられないよ」

「いいです、それでも。俺の言葉は胸に留めておいてくれれば。でも、誰かを頼ることをして下さい。貴女一人で抱えられるものじゃないでしょう」

彼女はありがとうと再度呟く。

ぽんぽんと頭を叩くとしゃくり上げる声が聞こえた。
俺は彼女にまわした腕に力をこめた。
ずっとひとりで誰にも気付かれずに耐えていたんだろう。

しばらくすると泣き止んだようだったが俺たちはずっと同じ体勢でいた。

「すまんな。いきなり泣いてしまって」

「いえ、俺でもお役に立てたのなら何よりです。でも、会ったばかりの俺なんかに話してよかったのですか？」

「命の恩人だ。話すには十分ではないか？けれど慰めてもらったりして……王にはどれだけ与えられるのだろうな。私には何もすることは出来ないのに」

彼女は申し訳なさそうに言う。
全く、難しく考えすぎだ。
けれど彼女の気がおさまらないのなら、

「では、俺の傍にいて下さい」

誰かが彼女をみていないと心配だ。
なんとなく、そう思う。

「それで、いいのか？それではまた私は与えられっぱなしだぞ」

此方を不思議そうに見やる。

「いいんです。俺は貴女にそうしていて貰いたい。貴女に何か与える権利を下さい」

「なんか、プロポーズみたいだ」

彼女はクスクスと笑いだす。

まぁ、笑ってくれたのだからよしとするか。

「まだお互い名乗っていませんでしたよね。俺はハヤトです」

「精霊に名前は無いんだ。だから名をくれないか？」

彼女は満面の笑みで問う。

「分かりました。……アイリスなんてどうでしょう」

こちらも笑んで返す。

「ありがとう。気に入った。私はアイリスだ。これからもよろしくな、ハヤト」

そう、嬉しそうに告げた彼女は何よりも輝いていてとても綺麗に見えた。

八話（後書き）

いきなり過去ばらしちゃったんですけど、あの人。
いきなり語りだしちゃったんですけど。

最後の名前を付けるくだりをやりたかったんです。
その為には……ばらすしか、なかった。

読んでて「！？」となった人、すいませんでした。

ていうか、書いててこの話突っ込みたいところが多々あるんですけど！！
初対面の人を抱きしめるなよとか、それでお前は抵抗しないのかとか。

……そういう人たちなんです突っ込まないで下さい。
話が終わる。

では長々と失礼しました。

九話（前書き）

総合ｐｔ３００いきました。
入れて下さった皆さんありがとうございます。

それにしても……
九話だというのに主人公の描写が一切ないという。
一話で変わったとか言いながら話に全く出てこないですね。
もう、いっそのこと人物紹介でも作るべきなんでしょうか。

九話

アイリスに名を付けたあと、さすがにずっと抱きしめているわけにもいかなかったので彼女を解放すると隣に腰掛けた。

「アイリス……って少し言いにくいですね。イリスでいいですか」

「ん。もちろん。……そうだ。言い忘れていたが、精霊に名をつけて自分の名前を渡したら、契約したことになるからな」

さらっと彼女が告げた言葉が一瞬理解出来なかった。

「……はい？」

それは俺の聞き間違いでなければ俺とイリスは契約を交わしたということで。

「聞いていないんですが。そんなこと」

「言ってないからな。訊かれなかったし」

確かに俺は訊ねなかった。

しかし普通、あの場面で断るとかはないだろう。

こういうものは先に言っておくものだと思うのだが。

「いいじゃないか。ずっと一緒にいられるぞ」

彼女は嬉しそうに笑う。

卑怯だ。
そんな顔されたら何も言えなくなってしまう。
俺は諦めたように息を吐いた。
「……別に拒否する理由もないしいいですけどね。で？その契約とやらはどんなものなんです？」
「契約した精霊の属性の力の増幅だ。これは私の場合全部の属性だな」
つまり俺の力は現在、神にもらった膨大な魔力＋全ての精霊魔法＋始祖精霊のバックアップ、というわけだ。
あれ？なんなんだろう。この状態は。
「どうしたんだ？」
黙りこんだ俺を不思議に思ったのかイリスが顔を覗きこんで来た。
「いえ、何でもないです。……ただ真面目に努力している人に少し申し訳なく思っただけで」
元の世界から来てまだ1日と経たずしてこの力。
魔法も一度も失敗することなくぶっつけ本番で成功してしまっているし。
しかも規格外に全種類使えて始祖精霊と契約。
俺だったらこんな存在知ったら切れる。
そう言った俺の言葉にイリスはよく理解出来ないといったように首を傾げる。
「別にそんなこと思う必要はないだろう？魔法というのは才能の問

題だ。いくら努力してもなかなか報われることはないんだぞ」

「……報われないんですか」

それはそれでどうかと。

「ハヤトの才能は凄いぞ？しかも精霊に懐かれているしな」

その理由を精霊たちに問おうとして途中で邪魔が入ったのだった。
ちょうどいい。
イリスに訊くことにしよう。

「何で俺は懐かれているんですか？特に何かをした記憶はないんですけど」

「んー。そうだな。理由は3つある」

イリスは自分の指を三本立てる。

「まず第一に精霊に気付けること。なかなか気付ける奴はいないからな。気付いてくれる存在は嬉しいんだ」

精霊に気づける人がなかなかいない？

「魔術師は？魔法を使うということは存在に気付けているのではないですか？」

「いや、彼らは知識として知っているだけだよ」

彼女は寂しそうに言った。

「では契約が出来るのは何故です？」

存在がわからないというのに契約など出来るのだろうか。

「契約するのは上位の精霊だけだ。上位精霊は人に姿を見せることが出来るからな」

なるほど。

風の精霊が見えなかったのは彼女たちは上位精霊ではなかったからか。

「説明に戻るが、第二に精霊を道具と思ってないことだ」

「道具って……。彼女たちには自我があるじゃないですか。下手な人間よりも頭がいいのに」

なのに何故彼女らを道具として扱う奴らがいるのか。

しかし彼女は首を横に振る。

「だとしても気付いてくれないからには意味がない。言葉を交わせるのはハヤトぐらいだろう？」

あぁ、そうか。

忘れていた。

だから風の精霊はあんなにも喜んでいたのか。

お礼を言ったとき嬉しそうだったのは感謝されていなかったからだろうか。

道具に感謝する人などいないだろうから。
誰も――誰にも見えていなかったのか。
精霊にも心があるのだと。

「で、最後にハヤトの魔力は精霊には心地いいんだ。精霊にのみ有効なフェロモンを撒き散らしている感じだな」

「ちょっと待って下さい」

何か今不名誉なことを聞いた気がするのだが。

「何かひっかかるようなことでもあったか？」

「えぇ、とてつもなく」

フェロモンを撒き散らす？
なんだそれ。
俺はどこぞの色男ですか。

「まぁ、気にするな。事実だ」

「その一言で余計に気になりました」

ここでグダグダ言っても仕方ないのはわかる。
けれどあの表現だけは止めて欲しい。

「こんなとこだな。ハヤトが精霊に好かれる理由は。風の精霊に関してはもう少し理由があるようだが」

「？それは？」

これ以上に何かあるというのだろうか。
出来れば三つ目の理由のようなものは止めて頂きたい。

そう考えていたら風の精霊たちが声をあげた。

？それは私たちが言うわ？
？王様はね、相性がいいのよ？
？私たちと性質が同じだから？

彼女たち、今の話を聞いていたのか。
風だから聞こえたのだろうが、今後俺にプライバシーというものがなくなりそうだ。

――――とりあえずそれは今は置いておこう。

「性質ってどんなものがですか？」

？それは――――？
？誰にも縛られない？
？自由気質？？
？自分の面白いと感じることを追求する？
？やりたいようにやる？

「つまりはゴーイングマイウェイだ」

……否定はしない。
けれどイリスさん。
貴女の一言は色々とくるものがあるんですが。

なんて俺が少なからずダメージを受けていると、
?:そうだ。王様?
?:始祖様を助けてくれてありがとう?
?:ありがとう?
?:私たちにはどうすることもできなかったから?
?:ありがとう?
精霊たちが思い出したようにお礼を言ってきた。
声は風の精霊しか聞こえないけれど、他の精霊も言っているようだ。
「俺は特に何もしてないですけどね」
「感謝は快く貰っておけ。――精霊たち、私の名はアイリスだ。
イリスと呼べ」
イリスは囁くように呼び掛ける。
精霊のトップだからな。
精霊たちに慕われているようだ。
「イリスは名前でよんで貰えるのに、俺は相変わらず王なんですね」
?:ごめんなさい、王様?
?:契約の一部に関わっちゃうから?
?:呼ぶことは出来ないの?
?:ごめんなさい?
謝られてしまった。

別に強制したいわけではないし、謝るほどのことではないのだが。
「彼女たちは力が弱いからな。名を呼ぶだけでハヤトに捕らわれる」
ハヤトの力が大き過ぎるんだ、と。
「それは……。知りませんでした。謝るのはこちらのほうですね。すみません」
?気にしないで？
?気にすることはないわ、王様？
でも王様と呼ばれるのはちょっと……。
誰だ？って思ってしまう。
「そういえばイリス。君も始め俺を王と呼んでましたよね。何故俺が魔王だと？」
魔力は抑えたはずだし……どうしてわかったのだろうか。
直ぐに見破られては俺の勇者補佐という体のいい勇者たちを観察するという娯楽……いえ、同郷の者の行く末を見守ることが出来なくなってしまう。
「今本音が……」
「何のことですか」
にこり、と笑いかける。
「すまない。気のせいだ」

顔を背けて震えているがどうかしたのだろうか。

「それより魔王だとわかった理由だったな！」

何かを振り切るように声をあげるイリス。

「精霊は力に敏感なんだ。精霊自体が力の塊みたいな者だからな。普通の精霊にはわからないかも知れないが私は始祖精霊。直に魔力を貰ったときにハヤトの魔力の量に気がついた。それだけ魔力を持っているんだ。魔王でないわけがない」

「――なるほど。ということはこの状態でイリス以外にはバレることはないですよね」

「そうだな。普通の魔術師よりも少し多いぐらいの魔力、としか感知出来ないだろう」

それは一安心だ。

と、思ったら。

コンコン、とノックされ、「ハヤト、入るぞ」とヒビキが声をかけて来た。

待って下さい。

イリスが部屋に居るんですけど。

「イリス、隠れられませんか」

「石に戻れるが……なんでだ」

「まだ精霊と契約したとバレたくないんです。手札は隠しておくものでしょう。いずれは打ち明けると思いますが、もう少し人となりを知ってからにしたいんです」
「わかった」

早口、かつ小声で会話するという器用なことをやり、なんとかヒビキが扉を開くまでにイリスが宝石に戻れた。

九話（後書き）

アイリスの愛称をアイかアリスかイリスかで迷ったんですが一番彼女に合っているのがイリスかなって。

十話（前書き）

すみません。
まずは言い訳をば。
小説書こうと思ったら寝てしまって起きたら日付が変わってました。
それから書き始めたので3時になってしまいました。
ちなみに念がややこしいのでこの話から――を『』に変えました。

話は変わって……

総合pt400突破ー！！
凄く喜んでいる作者です。
入れて下さった皆さんありがとうございます！！

十話

イリスの存在を隠しとおせたことに安堵しつつ、焦ってしまったせいで未だに心拍数が上がったままなのを無視して極めて平静を取り繕う。

「何か用がありましたか？影が薄いと感想で言われた勇者さん」

「いきなりのご挨拶だな！！そしてそれを言うな！結構気にしてるから！」

叫んでくるヒビキを無視してソファーまで移動する。
ヒビキはショックを受けたのか肩をおとして対面に座った。

「なんかお前、どんどん俺に対する言動がひどくなっていっていないか？」

「打ち解けて遠慮がなくなっていっているだけです。いい傾向じゃあないですか」

さっきのは少し焦っていたから本音が出てしまっただけなのだけど、ヒビキに対して遠慮がなくなってきているのもまた事実だ。
だってからかうと面白いんだからしょうがない。

「俺に被害がこなきゃな……」

何故かどことなく疲れているように見えるヒビキ。
気を取り直すようにひとつ咳払いをした。

「なんとなく視線を感じて見張られているんじゃないかと思ってな。お前のほうはどうなのかと思ったから来て見たんだ」

気付いたんだヒビキ。
野生のカンかなにかか？

「――――お前のとこからはそんな感じはしないな」

ヒビキは部屋を見渡してそういった。

「ああ、それは――――」

と説明しようとして俺は口をつぐんだ。
部屋に帰って来てから？風陣？を張った覚えがない。
ということはまさかイリスとのやり取りを見られていたのでは、と考えたが急いで取り消す。
先程ヒビキが監視の視線を感じないと言ったではないか。

――――では、何故？

そこまで考えると聞き覚えのある声が頭に響いた。

『ハヤト、監視の奴らは全部私が倒してしまったぞ』

念でイリスが話しかけてきたのだ。

『イリス、いきなり話しかけないで下さいよ。念で話せるなんて聞いてなかったんですから驚いてしまったじゃないですか』

『……その割には顔の筋一本も動いていないが』

対面にヒビキがいるんだ。
そんな愚は犯しません。
それよりも、だ。
『姿は見られましたか？』
『おそらくは……不味かったのか？』
『いえ、何も言ってなかったので仕方ないですよ』
精霊と契約をしていることがバレてしまったか……。
そして攻撃してしまったということは相手と敵対すると言ってしまったということで――――頭が痛いな。
「ハヤト？」
黙りこんだ俺を訝しく思ってかヒビキが声をかけてきた。
いけない。
思考に集中して会話していたことを忘れていた。
「すみません。えっと、監視のことですが、全員倒してしまったみたいですね」
「マジかよ。そういえばお前普通に魔法使えてたもんな」
すげー、とヒビキがこちらを見る。
そんな視線を投げかけられては居心地が悪い。

「そういうヒビキはどうなんです。勇者でしょう。普通の魔術師の１０倍の魔力があると聞きましたが」

そう俺が問うとヒビキが唐突に沈んだ。
何か悪いことでも言ったかな、俺？

「ヒ、ヒビキ？どうしたんです？」

「俺はまだ魔法を使えねぇんだよ」

机に突っ伏してそう言った。
森でも使っていなかったしな、と納得。

「よし、ハヤト。今から練習に付き合え」

ヒビキがガバッと顔を上げる。

「別にいいですけどね」

俺としても勇者の力量をはかれるし、アドバイスも出来ると思うが
――何やらおかしなことになってしまった。魔王が勇者の手助けなんてね、と内心で苦笑する。
ヒビキにはせめて死なない程度には強くなって貰わないと。
俺は彼を死なせたくはないから。

――だって、そのほうが面白そうでしょう？

十一話（前書き）

話が全然進まない……。
思ったんですが十話と十一話一つに纏めたほうがいいかも知れない。
今回凄く少ないです。

ここでお知らせ。
毎日投稿はいい加減キツイので一週間に三回ぐらいを目指して更新したいと思います。

十一話

「俺も先程魔法を使えるようになったばかりですが、やれるだけやってみましょうか」

アドバイスを。

「おう、頼むわ」

破壊光線などは出さないだろうと楽観して、部屋を移動したりしなかった。

面倒だからな。

「大切なのはイメージです。あとは行き当たりばったりで」

「……行き当たりばったりでサラは助かったのか」

ヒビキは少しひきつった笑いをもらした。

別にいいじゃないか。

結局助かったのだから。

練習してる暇などなかったのだし。

「ま、俺もそんな生き方してきたけどな」

「勝手に人の台詞と過去を捏造するな、ハヤト」

冷静に突っ込まれてしまった。

十八番です。声マネ。

「とりあえずやりましょうか。えっとまずは……」
そこで言葉がとぎれてしまった。
俺の場合精霊がスペルを教えてくれて直ぐさま実践だったからな。
何から始めればいいのだろうか。
ヒビキの属性もわからない――――あ、火ですか。
イリスが教えてくれた。
「もういいや。手に魔力をこめてなんか出して下さい火の玉とか」
「いきなり投げやりになったな！もういいやってなんだ！」
「教えるの止めますよ？」
「卑怯だ！！」
ヒビキは叫びすぎて肩で息をしている。
まったく、そんな大きな声を出したら誰かがくるぞ。
「誰のせいだと思ってんだ……」
「さぁ？誰でしょうかね」
俺がそう言うとじっと睨んできた。
俺は笑顔を返す。
「はいはい。いいから騙されたと思ってやってみる」
「お前の場合本当に騙してそうだから嫌なんだが……。やるだけや

ってみるよ」

俺に対して遠慮がなくなったのはヒビキも同じだと思う。

ヒビキは言われた通りにやろうとして、此方を見た。

「まず魔力がわかんねぇんだけど」

「……はぁ」

これみよがしに溜め息をつく。

「体の中心らへんに温かいものがあるはずですからそれを探して下さい」

「お前の溜め息が気になるんだけど……。まぁいい」

ヒビキが目を閉じて数分。

彼は目を開けると首を振った。

「わかんねぇわ」

「……残念ですがもう……俺に出来ることは」

俺は悲痛な面持ちで首を振り、うつむいた。

「死の床にある患者を見て家族に告げるような言葉を言うな。肩震えてるし、笑ってんのバレてんだよ」

「あはははは」

「堂々と笑えばいいってもんじゃない！」

頑張って笑いを抑えながら俺はヒビキに言う。

「いや、でも俺は直ぐにわかったんでどうアドバイスしたものか……」

これはちゃんとした役職についてる人にでも教えてもらったほうがいいんじゃないかな。

城にも魔術師がいるだろうし。

「そうだな。お前に教わるのはなんかありそうでいやだしな」

「なんかって何ですか」

まったく失礼な。

せいぜいからかうぐらいでお金をとろうというわけでもないのに。

「仲間からお金をとるという発想があることが驚きだ」

「そうですか？」

まぁ、そういうわけで明日魔術師を訪ねてみようということでこの話はお開きに。

「話は変わりますがヒビキ。武術かなにかをやっていたりします？」

「一応剣道部に入ってたが、なんでそれを聞くんだ？」

ヒビキは俺の言葉に目を瞬かせた。

「いえ、魔力を感じられないんじゃ魔法の才能がないのかなって。ここで武術も出来ないならいいとこないなと思いまして」

「よけいなお世話だよ」

十一話（後書き）

この話ハヤトがヒビキをからかって終わりましたよ……。

謝罪

この話が青葉　夜様の『黒い剣の異世界譚』の盗作ではないかという指摘をいただきました。

私自身はまったく意識して書いていませんでしたが、私も『黒い剣の異世界譚』を読んでいるので影響をうけていないとは言えません。似ていると思わせるような設定、ストーリー展開を書いてしまったことをこの場を借りてお詫びします。

ご迷惑をかけてしまった青葉　夜様、読者の皆様、本当に申し訳ありませんでした。

本来なら削除すべきなのですが、この作品を読んで下さっている人もいるため、まだ続けたいと思います。

今後の展開などがかぶっていないかなど確認するため、更新は遅くなると思います。

最後にもう一度謝罪を。
本当に申し訳ありませんでした。

十二話（前書き）

やっとの更新。
内容は今までどうりグダグダですが。

十二話

「なぁ、やっぱりお前の俺の扱いが下がってきたように思えるんだが」

夕食時、ヒビキが急にそんなことをいいだした。
一緒に食べているメンバーは俺、ヒビキ、サラだ。

「何をいきなり。そんなことあるはずないじゃないですか。俺は勇者である貴方を補佐する身。敬いこそすれ邪険に扱うなど」

「うん。俺のエビフライとりながら言うことじゃねぇよな」

そう言いながらヒビキは自分の皿の上を指さす。
ちなみに食事の内容は元の世界とあまり変わらなかった。
同じ食材を使っているのかと聞かれたら知らないけれど。

「これは貴方がメタボにならないように仕方なくとった措置です」

「それぐらいでなるかよ」

「……知っていますか。メタボ、正式にはメタボリックシンドロームは男性の腹囲８５センチ以上、女性９０センチ以上、それに加え糖尿病、高血圧、高脂血症のうち二つ以上をあわせもつ状態のことをさします」

「……それで？」

「それだけです」

「ちょっ！何がしたいん――」

何やら抗議の声を上げたヒビキの言葉を遮り、サラに話しかける。

「さて、食事も終わったことですし幾つか質問してもいいですか、サラ」

「うん。いいよ」

俺の言葉にサラは笑顔で了承。

この子はいい子だ。

年齢は対して違わなかったりするが。

「サラまで無視！？」

ヒビキがうるさい。

騒ぐんなら余所でやってくれ。

「勇者と魔王についてです」

それを聞いたヒビキは自分も気になっていたのか納得していない様子ではあったが声を収めて話を聞く体勢に入った。

「魔王の話をしたとき、かつて、と言っていました。魔王は前にも存在していたんですよね？」

俺の断定的な質問にサラは頷く。

「うん。今のは九代目の魔王になるわ。魔王と言うのは魔に属する

もの――魔力を持っている者なかで一番強い者に与えられる称号なの」

サラの語りに緊張感など露ほども見えない。
結構真面目な場面だと思うのだが、子どもが童話でも話す感じだ。
それでいいのか、王女。

「魔力を持っている奴からだったら魔王は人だったりするのか？」

「ううん。それはないわ。魔族と人間じゃ魔力量が桁違いだもの。人が魔王になることはあり得ないの」

あり得ない……あり得ないときましたか。
常識から考えて今回のケースは想定外。
なんたって神の手違いなんだからな。
しかし、断言出来るほど魔族と人間の魔力のスペックに差があるわけか……。

「魔族と人間は敵対しているわけですよね？魔族のほうが魔力が多いのに人間は何故滅びないのですか？」

「個体数の差よ。どんなに個人が凄くても数の暴力には逆らえないから」

なるほどね……。
関係ないがよくサラが数の暴力なんて言葉知っていたな。

そこでヒビキが口を挟む。

「魔王ってどうやって選ばれるんだ？」

俺は気がついたらなっていたけれど……。
どうやったら誰が一番強いなんてわかるのか。
「闘って決めるらしいよ。トーナメント式で」
「それは……」
原始的だった。
バトルロワイヤルよりは平和的ではある。
「普段なら魔王が死んでからまた新しい魔王を決めるんだけど、今回は特別みたいだね。前の魔王がいるにもかかわらず魔王になったんだもん。圧倒的な力、そこに存在するだけでわかる強さ。闘わずとしてわかるわ。あまり力に敏感ではない人間でもね」
……へぇ。
あの爺さんよっぽど怖かったのだろうか。
俺そこまで頼んでないよな。
まぁ爺さんは置いといて。
「ヒビキはそんな凄い奴に喧嘩売ったんですか」
「なんだろう。ハヤトの言葉からビシバシと険を感じるような気がする」
ヒビキは俺から視線を逸らして喋る。
「気がする、じゃないですよ。危険になったら俺はヒビキを売って

逃げますからね」

「めちゃくちゃ堂々と宣言したな。仮にも魔王を倒すために呼ばれた奴のセリフじゃねぇ」

「いや、俺被害者ですし。あの神のうっかりの」

そう言うとヒビキは変な顔をした。

「……あれ？俺はあの神に『間違って殺してしまったが……。ちょうどいいことに君には勇者の素質があるのう。ヒビキ君、勇者となって世界を救ってくれ。大丈夫！君なら出来る！！』って言われたから勇者やってんだけど……？」

これは……。

ヒビキ、簡単に爺さんに乗せられてるな。

いくら初対面で老人だからと言って油断してはいけない。

どんな大義名分があったとしても間違って殺されたのは事実。

未来ある若者の命を奪った奴に気を許すから騙されるんだ。

それにしても、たとえ神だからといってあの爺さんに騙されるとは、ヒビキは大丈夫なんだろうか。

将来が果てしなく不安になるんだが。

「……え？何？その可哀想なものを見る目」

「……。いえ、何でもありません。話を続けましょう。魔族の見分けかたなどはありますか？」

本気でわかっていないヒビキを放置。

構っている時間が無駄だしな。

「おい、気になるんだが」
まだ何が言っているがサラも気にせずに口をひらく。
「魔族ね。魔族は見掛けは人間とかわらないわ。でも、目に白目がないの。だから結構分かりやすいと思うよ」
「……聞こうや、人の話」
いじけてる。
ヤバい。楽しい。
「では勇者の話に移りますが、勇者はヒビキで初めてなんでしょうか」
「そんなことはないわ。ヒビキさんは特殊だけど、今までは王が募集をかけて大会の優勝者が勇者となって魔王を倒しに行っていたの」
まだこの国のことはよく知らないがこの国からしか勇者はでないのだろうか。
他の国も存在するはずだろう。
俺の顔を見てそんな考えを読み取ってくれたのかサラが解説してくれた。
「勇者は国に一人ずついるよ。それで、魔王を倒した国は国の発言権とか政治的立場とかがますのよ」
ニコニコ顔で言ってくれたサラ。

勇者に言っちゃ駄目なんではないだろうか、そういうことは。
どうしてここまで国にいい待遇をされるか不思議だったけれどようやく合点がいった。
魔王が魔族を率いてやってくるからなんて建前ではないだろうか。

「……あれ？何でヒビキさんいじけてるの？」

気付いてなかったんだね、サラ。
それはある意味俺よりも酷くないか？

十二話（後書き）

何故にエビフライ……？
インスピレーションです。

十三話（前書き）

更新何日ぶりだよって話ですよね。
すいません。
更新回数とかもう決めないようにしよう。
守れないから。
でもいくら遅くなっても続けます。
学校に行っていた時は登校中とかに書いていたんですが冬休みってなかなか……。

今回なんかいまいち話が気に入らなかったり。

十三話

なんだかんだありましたが今日は異世界二日目。
朝から俺は精神的につらい目にあっている。
「イリスさん、起きて下さい」
現状。
俺は今イリスに抱き枕にされています。
あれ？おかしいな。
昨日寝るときイリスは石に戻ってから寝たのに。
「んー」
俺の必死の呼び掛けをイリスは拒否。
離れるどころかよけいにくっついてきた。
……暑い。
こう思うことを誰が責められようか。
だって今は春とはいえ、布団を被った状態でこんなにくっつかれていたら暑い。
と、いうか今まで考えないようにしてきたが。
俺の足はイリスの右足に絡まれていて、顔は半分胸に当たっている。
どこのラブコメ主人公？と誰かにききたい。
感覚は頭の片隅に追いやろう。
精神がもたないからな。
何故俺は力づくでどかさないのかというとイリスの力が俺の力より強いからだ。

言っておくけれど俺の力が弱いなんてことはけしてない。
この年頃の男子の平均ぐらいはある。
イリスがその細腕に似合わない怪力を発揮しているだけた。

「……はぁ」

まったく朝から災難だ。

そう考えていたら新たな災難がやってきた。

?:王様、大変？
?:お知らせがあるわ？
?:風の噂？
?:仲間から来たの？

風の精霊が慌てた様子で話しかけてくる。

「なんでしょうか」

その様子に嫌な予感がしつつも俺は彼女らに訊ねた。

?:魔族は王様が気に入らないらしいわ？
?:人間のくせにって？
?:こうなったら勇者と共に殺してやるって言ってたらしいよ？

――――うわぁ。なにこのいきなりの展開。最悪だ。なんて朝だよ。

神様、魔族は俺に従うとか言ってなかったっけ。
実際反乱起こされているんだが。

「何で人間ってわかったんでしょうね」

ハハ、と乾いた笑いを出しながら訊ねる。

？森で見ていた奴がいるらしいわ？

？王様がこの世界に来たばっかりのとき？

？魔力を抑えてなかったから？

？だからわかったみたい？

ああ、あの時。

見られているなんて考えもしなかった。

これから周りをもう少し気にしよう。

「俺が勇者と行動していることはバレてますか？」

？ううん？

？言ってなかったわ？

？多分大丈夫よ？

？王女を助けに行くとき風の補助があったでしょ？？

？そのときに上手くまけたみたいよ？

それならまだ一安心といったところだろう。

居場所、バレないようにしないと。

「その噂は人に広まっていませんか？」

？人には広まってないわ？

？魔族の間での話？

よかった。

人に広まるとなるとタイミング的に俺が疑われるかも知れない。
しかし困ったことになったな。
俺は人からも魔族からも狙われていることになったわけだ。
取り敢えず味方は精霊ぐらいか。

「どうしましょうか」

そう呟いてある考えが思いついた。

……前魔王をヒビキに倒してもらったら解決じゃないか？
精霊たちの情報によると前魔王を中心として俺に反乱を起こしているわけだ。
勇者共々って言ってるのだから奴らは勇者の敵でもある訳だろう。
勇者が前魔王を予言にあった魔王と勘違いしてくれたら、ヒビキが前魔王を倒してくれたあと、俺は魔王とかいうしがらみから解放されるんじゃないか？
俺がいくら強かったって今みたいにセーブしとけば俺が魔王だなんてわからないはずだ。
願わくは前魔王がショボくないことを祈ろう。
予言をアテにして行ったのに間違って他の勇者とかにあっさりと倒されたりしたら魔王は他にいるんじゃないかなんてことになるかも知れないしな。

でもこの計画は魔族と人間の間で情報が交わされないときだけに有効。
前魔王が人間の魔王と勇者を殺してやるとか宣言したら意味が無くなるんだよな。

そんなことをつらつらと考えているがひとまず今考えるべきことは

やはり、イリスのことだったりするわけで。

「イリス、いい加減に起きてくれないと人がくるかも知れないのですが」

そのうち誰かが起こしにくるはず。
まったく変なことは起きなかったとはいえこの状況は見る人に誤解を与えてしまうだろう。
誰かに見られた場合、どうしようかと考えたら思わず乾いた笑いがでてしまった。

――――うん、シャレにならない。

?王様、誰かが来るよ?
?勇者だわ?
?勇者がこっちに来てる?

なんてタイミングだよヒビキ!!

こうなったら叩いてでも無理矢理イリスを起こすか?
俺がそんなことを考えている間にヒビキは既に扉の前に。

ヒビキはノックをせず「入るぞ」と声をかけて扉を開く。
部屋の人は何も言ってないんですけど!!

「待って……下、さい」

意味のない抵抗だった。
後半の言葉なんてヒビキと目を合わせながら発していたし。

半身部屋に入った状態でヒビキはポツリと呟いた。

「手ェ出すの、早いな」

「……切り裂け？空断？（クダン）」

鎌鼬がヒビキに向かう。
勿論手加減して魔力をあんまり込めてないから当たっても軽く切り裂かれるだけだ。
鎌鼬の数も一つだけにしたし。

「うぉぉおッ！？」

そんな俺の手加減しまくりの攻撃をマトリックス避けするヒビキ。
器用だな。

「お前何してくれんだよ！！」

「ムシャクシャしてやった反省も後悔もしていない」

「最悪だな！！」

ヒビキの大声で目が覚めたのかもぞもぞとイリスが動き始めた。

「……ハヤトか？おはよう」

「おはようございます」

目を擦りながらまだ眠いのかぼうっとしている。
ヒビキのことはまったく視界に入っていないらしい。

ヒビキにイリスのことを説明しないといけないのかと思うと面倒だという気持ちが膨らんでくる。

窓から見る空は鬱陶しいくらい晴れ晴れとすみわたっていた。

さて、これからどうなることやら。

十四話（前書き）

最後に投稿したのが１２月。今は５月。
……すいませんでしたー！

何だか書く気が全くおこらなくて、結果放置。
小説も取り下げようかと思ったのですが、友人の反対を受けて思いとどまりました。
昨日ふらっとこのサイトに来て感想を読んで、こんな小説でも待って下さる方がと思うと頑張って見ようと思いました。

これから、更新は気まぐれで行いますので期待しないで下さいね。

久々の更新ですが内容はこれ、閑話じゃないかというものです。いつもどうり話がすすみません。

自己満足だからいいやと開き直ることにしました。

では長々とすいませんでした。

十四話

小鳥達が囀ずる声が聞こえ、この城は森が裏手にあったなと思い出す。
そう思うと空気が自分の住んでいたところより綺麗な気がした。
空はやはり雲一つない青空で、

「こんな日は惰眠を貪っていたいですね」
「説明はどうした。駄目人間」

今俺は、色々と説明しろ、とヒビキに詰め寄られ、部屋にあったソファーに座らされている。
対面には攻撃したせいか少し苛ついているヒビキ。
隣には朝があまり強くないのかうつらうつらしているイリス。あ、肩にもたれてきた。
それに伴いヒビキの苛つきも上がった。

「本当に色々聞きたいが、まずその子は誰なんだ」
「イリス、正式にはアイリスです」
「名前を聞いてるんじゃねぇ、ってハヤトお前わかってるだろ。にやついてるぞ、おい」

やれやれ、せっかちなひとだな。
周りの人から嫌われますよ？何事も余裕を持っていないと。

「茶々はいいから早く説明しろよ」

疲れた様子で長いため息をはくヒビキ。
怒りはあまり持続しなかったようだ。

「お前の言うことにいちいち反応していたらこっちの身が持たないと理解した」

ヒビキのくせに。
まあいい。
ここでぐだぐだと話を先送りしていても意味がない。
俺は軽く息を吐き出した。

「では、説明に入りましょうか。イリスは精霊です。昨日もらったペンダントの宝石に封印されていたらしく、俺がうっかり解放してしまったらしいです」
「うっかり？」
「はい、うっかり。その後契約をしたんです。だからイリスもパーティーインしたメンバーですね」

ふーん、と呟くヒビキ。

「俺のお手柄じゃないですか。二日目にして早速1人ゲット」
「確かにそうだが自分でお手柄とか言うな」

よし、上手いこと詳しく告げずにはぐらかせれた。
そこで漸くイリスがヒビキを認識。
朝、本当に弱いんだな。

「お前は誰だ？」

遅い、遅いですよイリスさん！その台詞前回言ってもいいぐらいのものですよ。もう貴女の素性を大まかに説明しおわりましたよ。

「はじめましてになるのかな。俺はヒビキだ」
「私はイリスだ。ところで王――」

イリスの台詞の途中でガバッと口をふさぐ。
危なかったー！
忠告するの忘れてた。
王って呼んだらモロバレじゃないか！

「いいですかイリス。俺のことを王と呼ばないように。勇者に魔王とバレてしまうでしょう」
「うっ。そうか。あまり頭が回っていなかったからな。そこまで考えが及ばなかった」

貴女が頭が回っていなかったのは見ていて直ぐにわかりましたけれどね。
目の焦点が合ってなかったですから。

「取り敢えず、以後ボロをださないように気をつけていきましょう」
「おー？」

右手を軽く握ってその手を上に突きだし、ちょっと小首を傾げるイリス。
可愛いんですけれどね。
今ヒビキの前で小声で話し合っている最中ですからね。不審に思われる行動止めて下さいね。

「と、言うわけで」
「何が、と言うわけかこっちには全く分からないけどな」

目の前でないしょ話されても追及を諦めているヒビキ。昨日で大分

俺に対する接し方を学んだようだ。
彼が突っ込み役という事実は変わらないから今後も色々と苦労するのは変えられないと思うけど。

「で？イリス、さっき何を言いたかったんです」
「あ、ああ。ヒビキとハヤトはどういう関係なんだと聞こうとしたんだ」
「だそうですよ」

話をヒビキに振る。
すると彼は疲れた目で見返してきた。

「何でそこで自分で答えないんだよ」
「説明って労力を使いますよね」

にっこり笑ってヒビキに告げる。
俺は朝から色々あって疲れたんですよ。精神的に。

「……まぁいい」

諦めたヒビキに現在の状況を説明してもらった。

「俺の話を２２文字でまとめたな」
「書くのが面倒ですし、読者も読むのが二度目になるでしょう。そんなことはおいといて次いきますよ、次」

ヒビキの質問を促す。
ここまで話すのに無駄に時間をとっているし。
ヒビキは釈然としないながらも話を続けてくれるらしい。

「イリスのことはわかった。で？どうなって朝の状況になったんだ」
それに対する回答を俺は持っていない。むしろこちらが聞きたいぐらいだ。
何しろ起きたらああなっていたのだ。俺は被害者といえる。精神の消耗が激しかったからな。
そういうことなので回答を求めてイリスを見る。
「それか。私がハヤトより早く起きたから、ハヤトを起こそうと思ったんだが、こんな天気のいい日は二度寝をしたくなる――――」
「お前もか！」
ヒビキの突っ込みが部屋に響いた。

「イリス、さっきの説明以外に理由があるでしょう？」
ヒビキが部屋から出た後、隣にいたイリスに訊ねる。
「なっ何のことだ？」
「……言葉がすでに動揺を表してますよ」
肩もびくってしていたし。素直な反応は可愛いですけどね。
「……別に。ちょっと人肌が恋しかっただけだ」
彼女は下を向いてぼそぼそと呟いた。
「可愛いですね」

「うるさい―!!」

十五話

朝食を済ませた後、昨日話していた通り、宮廷魔術師に魔術の教えを乞いに行くことになった。
ちなみにイリスと合ったサラの反応は、

「へぇーイリスちゃんって精霊なんだ。凄いねー」

というものだった。

相変わらずサラはいい子だ。
精霊を道具としている世界で生きているのに、偏見とか相手を利用しようとする思惑とか、そんなのとは無縁の次元に生きている。
思わず頭を撫でてしまった俺は悪くない。
少し簡単に受け入れすぎじゃないかと思ったが考えないこととしよう。
怪しげな壺とか買わされてないよな？
本当、心配になってくるんだけど。

で、何事もなく用意してもらった部屋に到着。

「お初にお目にかかる、宮廷魔術師長のトーヤ＝アイゼンだ」

そう挨拶した彼の第一印象は、

「……武士ですね」

「ああ、武士だ」
「古き善き侍の魂ですよ（？）」

そう、武士だった。

背は高めで、長い髪はサイドを残して後ろを高いところでくくっている。
年の頃は二十代半ばであるが厳格な雰囲気と真面目そうな顔つき。
そして言葉使い。
それが俺たちに彼を武士だと印象付かせた。
けれどそれはけして粗野なものでは無く、凛とした涼やかな目元と意志の強い瞳が上品さを醸し出していた。

しかし魔術師長が武士ってミスマッチすぎだろ。
服が洋服なので明治維新後みたいな感じだ。

「すまないが、武士とは何の事だろうか」

困ったように眉尻を下げられ、慌てて言葉を紡ぐ。
どうやらこちらには武士と言うものが存在しないようだ。

「いえ、こちらの話なので気にしないで下さい」
「？そうなのか」

まだ不思議そうにしている彼には悪いが俺には気になっていることがある。

「ところで得物はやはり刀なんですか！？」
「だから彼は魔術師だと紹介されただろ！！」

意気込んで思い切って訊けばヒビキに頭を叩かれた。
「えー、でも気になりません？」
不満そうに言うとヒビキは眉間にシワを寄せて考えるようにしてうなずいた。
「確かに気になるけどな……。本人の隠された過去とかに触れてしまったらどうすんだよ」
「……隠された過去ですか」
彼の言葉を頭に通し、どんなものがあるかと具体例を考えてみる。
「例えば……幼いころから剣士を目指していたが無理な鍛練が祟って右足を負傷。日常生活に負担はないが剣士としてはやっていけない。魔剣士になるつもりだったから魔法の才能はあった為、せめて魔術師になろうと魔法を極め、現在、魔術師長として努力が実った、とか？」
「あと、前魔術師長から実力を認められて推薦されたが、年齢が若い為に重臣たちからは侮られたり、魔術師以外からは嫉妬されたりとかな」
「でもって顔もいいから前魔術師長に取り入ったのではという噂さえ流れたりしてまったとかどうでしょう」
「あー、ありそうだな。捏造だけど」
ははははと軽く笑うヒビキ。
俺はでも、と首を捻る。
「隠されてますか？この過去？」
「隠された、と言うより触れて欲しくないところか？」

本人の前で自重することなくヒビキと二人で悪のりして適当に作ったけれど、まぁあたっているわけはないだろう。
と、話題の彼に目を移してみると

「……」

部屋の隅に体育座りをして重い空気を纏っていた。

あれ？

サラを見てみるといつも通りに笑って言った。

「トーヤさんこの状態に一度入るとなかなか元に戻らないから、先に兵士の訓練場に行く？」

つまり彼は放置しよう、と？
俺の問いかけに彼女はうん！と元気よくうなずいた。
……子供の無邪気さって時には残酷だということを理解。

でもってよくこの状態に陥るんですね、彼。
サラが対処方法（？）を知っているぐらいだから。

「ん？今のハヤト達が言っていたことは当たっていたのか？」

トーヤさんから三歩離れたところで観察する目を離さないままイリスが訊ねた。
イリス、じめじめしたのが移るから彼からは離れなさい。
そしてサラ、人にキノコは生えないと思いますよ。

「反応をみる限り当たってたんじゃねぇの？」
「あの人の過去は知らないけど噂は聞いたことはあった気がするよ」
トーヤさん、なんか、ごめんなさい。

結局トーヤさんは放置して先に訓練場に行くことになり、その途中で読者が忘れていないか心配なキースさんに会った。
「なあ、あれってケンカ売ってんの？」
「すいません。あいつのあれはデフォルトなんです」

忘れてた人は五話を参照！
何気に三回目ぐらいの登場の第一王女近衛兵の団長さんです。
「やっぱあいつ切っていいか？いいよな？ヒビキ放せぇー！」
「すいません、あんなんでも一応必要なんです！！」

一応とは失礼な。
ところで最近俺の性格変わってきてません？
テンションが高くなったっていうか。
もっとクールなキャラでしたよね？
「環境に慣れて本性がでてきたとかそんなところじゃないか？」

イリス、そうかもしれませんね。
けれど日本にいた時はあんまり表情筋が動かない日々を過ごしていたんですよ？
「じゃあ、からかいがいのある人達をたくさん見つけたからじゃないかな？」
それもありますね。
けどサラの口からそういうことが出ると思いませんでした。
「母様がそんな感じのことを言ってたの」
和やかに話し合う三人の後ろではヒビキとキースさんが必死の攻防を繰り広げていた。

「さて、ヒビキお疲れ様です」
「誰のせいでこんなに疲れる羽目になったと……」
恨みがましいような様子で睨んでくるヒビキににっこりと笑う。
「だから労いの言葉をかけてあげたでしょう」
「いや、それは当然の――――」
「それで、キースさんも訓練場に？」

毎度のことながらヒビキの抗議の声を遮り、キースさんに話を振るとキースさんはヒビキを同情の憐れみを持った目で見てからこちらに視線を戻した。
イリスは気の毒そうな表情でヒビキを見ている。サラはいつも通りだ。

「ああ。書類仕事の合間に体を動かそうと思ってな」
「ちょうどいいですね。じゃあヒビキと対戦して下さい」
そう俺が告げるとヒビキは顔をひきつらせた。
「俺はいいけどさ、本人の了承は？」
ヒビキに目を向けて訊ねるキースさんにきっぱりと言う。
「関係ありません。ともかく、この世界でヒビキの剣がどこまで通用するか見ておいたほうがいいでしょう。力量を計り間違ってジェンドとか嫌ですから」
「そうだけどな、せめて前もって言ってくれよ」
心の準備が……と呟くヒビキに
「頑張って下さいね」
と応援しといてあげた。
「提案はお前なのになんでさも関係ないようにしてんだよ！」

訓練場は打ち合う金属の音や激などで溢れていた。

「おー。さすがファンタジー」

「他人事だな、完全に」

ヒビキはまだ恨めしそうにしているが無視。

そんなことで俺の神経はへこたれません。

「ヒビキ、ほら」

キースさんが刃を潰してある練習用の剣をヒビキに渡した。

「やっぱり西洋剣か……」

「それは仕方がないことでしょうね」

ヒビキは剣道をやっていたというから西洋剣では握るのに違和感があるのだろう。

この世界に刀があればいいが、無いならば剣に慣れてもらうしかない。

キースさんが手の空いている兵士に声をかけ、審判をしてもらうことになった。

二人は向かい合って立つ。

二人の雰囲気に当てられたのか、騒がしかった周囲は動きを止め、だんだんと辺りに静寂が広がっていく。
ヒビキは無言で切っ先を正眼に据え、キースさんは真面目な顔になってヒビキに剣先を向けた。

「――――はじめっ！！」

審判の鋭い声が響くと同時に二人は動きだした。

ヒビキが右足を大きく踏み出し、勢いをのせたまま相手に打ち込みにいく。
それを横から払われ、剣筋を変えられる。
ヒビキはすかさず半歩下がり間合いをとる。
二人が同時に降り下ろし、互いに競り合ったと思えばキースさんが体を後ろに引き、ヒビキの体勢を崩した。
その隙をついて斬撃を放つが、それが届く前に察知したヒビキが後ろに引いたことでかわされ、また、間合いをとる。

そんなことが幾度となく繰り返された。
立つ位置を変えて続けざまに斬り結ぶ彼らの動きは次第に速さを増していき、辺りには彼らの打ち合う、鈍い金属の音が響くだけで息をすることさえはばかれるようだった。

ヒビキは円弧と直線の動きを組み合わせて敵の急所となるところに無駄無く斬りかかる。
ヒビキを攻とするとキースさんは守の動きで、それは彼の近衛という役職がそうさせるのか、相手の剣撃を見据え、最小限の動きでそれを回避し、避けられて出来た隙にすかさず斬りつける。
いつまでも続くかのように思えたが終わりはやってくる。

ヒビキが下から跳ね上げるように打ち込んだことでキースさんの手から剣が離れた。
それは宙に浮き、下に大きく音を立てて落ちた。
それと同じくしてヒビキの手からも剣から離れる。
よく見てみると小刻みに手が震えていた。

「引き分け、ですかね」

ヒビキはキースさんより長く剣を握っていたが、あの手で止めをさせなかっただろう。

「――――っ、はぁっ」

大きく息を吐き出しキースさんは倒れるように寝転んだ。

「あーちくしょー。俺軽い運動のためにここにきたのに何でこんなに疲れなきゃなんねぇんだよー。しかも勝てなかったしー」

全く軽いとは言えない運動をしてしまったから汗だくだし、息も荒い。
それはヒビキも同じだった。

「手合わせ、ありがとうございました」

倒れ込んでいる彼に頭を下げるヒビキに、彼はひらひらと手を降って答えた。

「おー。それよりも敬語はなし。堅苦しいのは苦手だから、俺」

「良かったです。俺と口調が被りますからね」

「……」

「今の話で言うところはそこなのか？」

十五話（後書き）

気分で新キャラを出してみました。
キャラをどうするか考えて、もう、これでいいやって。ハハッ。
キースさんと名前が少しかぶっていることに後で気付きました。
ネーミングセンスを、誰か、下さい。

そして模擬戦。
……なんだかもう、疲れたよ、パト〇ッシュ。

あれは、ね、力尽きたのがわかる仕上がり。
そして多分な誇張。

初めてかいたから仕方がないじゃないか！
と、開き直ってみる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9028i/

NO FEAR

2010年10月9日11時29分発行